

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

「いく野の道の遠ければ」（聖×景風）

【作者名】

順砂

【あらすじ】

聖に一服盛られた景が連れて行かれたのは……？短編というより掌編で、昔、自ブログで勝手にやつていた百人一首企画の一つを改稿・再掲番です。

投稿テストを兼ねて。

「いく野の道の遠ければ」（聖×景風）

小倉百人一首 第六拾番

大江山 いく野の道の 遠ければ まだふみもみず 天の橋
立

小式

部内侍

大江山を越えていく、生野の道は私には遠すぎて、まだ天橋立の地も踏んでいませんし、母からの文もみていませんよ

なんでこんな所に居るのだろう?

私は 加東景はすこし開けた高台に止められた車の助手席に座っている。空けられた扉から少し肌寒い朝の風が吹き込んできて、そんな扉に佐藤さんが腕をついて微笑んでいると、まるで映画のワンシーンのようだった。

でも、なんでこんなことになっているのか、全く記憶がなかつた。昨日の晩は、確か大学を五限目までうけた後、帰つて弓子さんと少し話した。それから、部屋に戻つた で、いつものように佐藤さんが寝ていたわけだ。

そこまではいい。残念ながら、いつものこと。

それでこれもいつもの通り一人で夕食を食べて、その後に佐藤さんが自主休講した講義のノートを『』とせてあげて……？この後の記憶が……？

ああ、そうだ、佐藤さんが一休みとかいつてコーヒーを入れてきて……！ そう、そういうこと、ね……！

「一服、盛つた？」

「あれバレちゃつたか」

バレないとでも思ったのだろうか？いくらなんでも、あんなに不自然には寝ないし、ここまで来るまでにまったく起きなかつたというのもおかしい。

いや、そもそも何故こんな所まで来なくてはいけないのだろう。

「佐藤さん、これはどうこうことかしら？」

「いやあ、ほら昨日の日本文学史で、加東さんもつていだじやん？あれで、やつたでしょ」

「で…、ここまで来た、と？ 大江山の酒呑童子に食われてしまいなさい」

佐藤さんの突飛な行動はいつものことだが、流石に今回は怒りを通り越して呆れてしまった。その佐藤さんと言えば「加東さんの寝顔可愛かったよ」などと、そんな私の気持ちを知らないのか、もし知っているのであればわざと私の感情まで逆なでしているとしか思えない事を口走っている。若狭湾に沈めてしまいたい。

しかし、来てしまった者は仕方がない。私は車から、とりあえず降りてみることにした。

そして、頬にさわやかな空気を当てながら一、二歩進み、景色を望んで 絶句した。

朝の霞の中、浮かび上がった砂州と海が織りなすラグーン 橋立が、曙に照らされて、本当に雲間にかかる橋のようだった。神的な光景だった。

私がその風景に感動して立ちつくしていくと、佐藤さんは近寄ってきて、私の横に並び微笑んだ。

「ふふ、加東さん、今、来て良かつた、思つたでしょ」

図星だった。そして、ふとその表情を見て息を呑んだ。そのエキゾチックな微笑が東から昇った朝日に照らされて、例えようなく純粋にきれいだった。まるで目の前の素晴らしい絵画に溶け込むように最初から用意されていたようだった。

「まあね」

私は溜め息をつきながら答えた。すこし頬を赤らめていたかもしないけど、それは天照の所為にしてしまうこととした。

ただ、もう少し、彼女を含めた景色を見ていたかった。

「じゃあこの後、京都観…」

「帰るわよ、今からなり四限で聞かねばつてしまふ？」